10. 杉野屋のお講

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鶴賀, 智子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4987

10. 杉野屋のお講

鶴 賀 智 子

Ⅰ. はじめに
Ⅱ. 杉野屋の寺院
Ⅲ. 杉野屋のお講
Ⅳ. お講の事例
Ⅴ. 住民のお講に対する意識
Ⅵ. おわりに

Ⅰ. はじめに

杉野屋は世帯数が166という小さな集落だが、安専寺と光照寺という2つのお寺がある。ここではお寺やその門徒で行われる様々なお講の模様を概観し、杉野屋のお講がどのような機能を持ち、時代の中でどのように変化しているのか考察したい。

Ⅱ. 杉野屋の寺院

杉野屋には寺院が2ヵ寺あり、宗派はともに浄土真宗本願寺派（お西）である。杉野屋が含まれる羽咋郡では、本願寺派の寺院が21ヵ寺ある。かつて「邑知郷［おうちのさと］」と呼ばれていた、志雄、飯山［いのやま］など、ちょうど子浦川を挟んで北に位置する地域に本願寺派の寺院は多く分布する。逆に南に位置する押水などには、本願寺派の寺院がない。現在、石川県において、本願寺派と大谷派の寺院の割合は1対10であり、杉野屋の属す羽咋郡志雄町でも、全体としては大谷派の寺院のほうが多いのだが、この邑知郷の地域で本願寺派の寺院が集中している理由ははっきりしない。

この節ではお講に関する記述の背景として、杉野屋における宗派のうちわけと、安専寺と光照寺について簡単に述べる。

杉野屋166世帯の宗派のうちわけは、浄土真宗本願寺派が146（安専寺門徒が58、光照寺門徒が63)、真宗大谷派（お東）が18、日蓮宗が2である。ほとんどが浄土真宗本願寺派に属し

ている。

杉野屋の２つのお寺は行事が重ならないように相談して日程などを決めている。それぞれの門徒構成と年間行事は以下の通りである。

・安専寺：門徒数は隣の中川町と合わせて70世帯（うち杉野屋は58世帯）である。

・光照寺：門徒数は金沢や氷見と合わせて約200世帯（うち杉野屋は63世帯）あり、20カ所に点在している。

表１　安専寺と光照寺の主な年間行事

安　専　寺	光　照　寺
元旦修正会（1月1日）	元旦修正会（1月1日）
永代祠堂経（3月、7月）	永代経、祠堂経（3月、7月）
報恩講（11月1、2日）	報恩講（10月3、4日）
御七昼夜（2002年は12月7、8日）	御七昼夜（2002年は12月14～16日）

Ⅲ．杉野屋のお講

１．お講と講社

お講は室町時代後期にはじまる。各地に大名が郡雄割拠し、農民が惣村という自治組織を持って自らを守っていた頃、本願寺第８代宗主蓮如上人（1415－99）が講社（御講組）を組織し惣村を直接つかむことで本願寺の勢力を広めた。「講社」＝「参拝部」という組織が組まれるようになったのだ。こうしてできた門徒集団によって、布教のための「お講」が開かれるようになった。お講は主にお経の唱和、僧侶によるご消息の読み上げと法話という内容で行われる。

２．羽水組十九日講

杉野屋の講社は「羽水組［うすいそ］十九日講」であり、その名前は羽咋の「羽」、押水（もしくは氷見）の「水」から決まったと言われる。その構成は志雄町、羽咋市、志賀町、富来町の21ヵ寺の門徒だが、うち富来町の福浦［ふくら］、三明［さんみょう］、町居の３ヵ寺を除く18ヵ寺によって報恩講の行き来をしている。羽水組はさらに地区ごとで「組［くみ］」に分かれており、杉野屋は「杉野屋組」に属す。

お講の日取りは講社が自主的に決めており、連絡が不十分なために寺院と噛み合ないこともしばしばあったという。

3．杉野屋のお講

杉野屋のお講は、寺院で行われる「寺お講」の十三日講と十九日講、在家の民家で行われる「在家お講」の七日講と晦日講がある。これらはもともと十九日講が母体となって増やされていったお講で、その運営は羽水組十九日講でなされる。それぞれのお講の進行の仕方は同じであり、寺お講と在家お講に違いはあまりない。「お講」は蓮如上人の布教活動を継ぎ、教えの理解を高め合うことが目的の法要で、それとは別に、親鸞聖人の御恩を報い、偲ぶ「報恩講」、「御七昼夜」というお寺主催の法要がある。また、男女別の講社として、興教会と2002（平成14）年に解散した玉日講がある。以下では、それぞれのお講について由来などを中心に記述する。

（1） 寺お講

①羽水組が運営する寺お講

・十三日講

第11代宗主顕如上人（1543－92）の亡くなる前に、本山を造るための納物に対する礼状であるご消足の日付けから「13日」になったのではないかと推測されている。

・十九日講

「十九日」に意味があるのかは分からないが、邑知村から19日に人が集まったからかと言われる。

十九日講には3通のご消息が存在し、415～420年前、或はそれ以前のもので、「邑知郷」と記されている。十九日講のメンバーは、金沢で行われているお講がおよそ200年前からのものであるのに対し、十九日講が約430年間という、歴史ある活動であるということにとても誇りを持っていた。

・御崇敬

羽水組の18ヵ寺で順番に廻ってくる、年に一度の大きなお講である。もともとは2月であったが冬で寒いため、1955（昭和30）年前後から6月15～19日の5日間にした。参加者は220、230人。最終日に各組からお金を集めて、本山や別院に納められる。

②各寺院が主催する寺お講

・報恩講

報恩講は、宗祖親鸞聖人を偲ぶ法要であり、命日である1月16日（旧暦11月28日）を中心として、本山で1週間の報恩講の法要が営まれる（御正忌報恩講、1月9日～16日）。同時期に末寺でも営まれていた。しかし、昔は、本山から70里以内の範囲にある末寺住職は、全員その本山の法要に奉仕せねばならなかったので、末寺では適当に日をずらして、それぞれ法要を営んだ。これを正式には「引上［ひきあげ］報恩講」というが、簡単に「報恩講」と呼ばれてい

る。杉野屋の報恩講は、光照寺では10月3、4日に、安専寺では11月1、2日に行われている。なお、この時期に住職は各門徒の家々へ訪れ、仏前でお経をあげる。

・御七昼夜

御七昼夜はもともと親鸞聖人を偲ぶために1月に行われていた法要であるが、1月は豪雪の日が続き法要を行なうことが厳しいために、12月に引き上げて営まれるようになった。御七昼夜と報恩講は、本来は同じ法要である。

2002年、光照寺では3日間（12月14～16日）、安専寺で2日間（12月7、8日）に渡って御七昼夜が行われたが、昔は名前どおりに7日間行われていた。1日目に「若い衆お講」、3日目に「カカお講」、5日目に「トトお講」をし、他はお金を使わないために普通のお参りをした。

「中日（なかび）」にあたる4日目の満座の時に「おてのこぶ」と呼ばれるおにぎりなどの軽い食事が配られ、それ目当てに子供達がお寺に寄ってきたという。その「おてのこぶ」がなんとも美味しかったと、当時を知る人は振り返っていた。ちなみに、現在安専寺では、よくお寺の世話をしているBさん（70歳代女性）の、とても大きなおはぎが振る舞われている。光照寺ではおにぎりと漬け物が配られている。

(2)在家お講

「在家お講」は、本来、門徒宅で人々を招待して開かれるお講である。しかし、終戦後は主にお寺や集会場で開かれるようになった。昔は人々を家で接待することが誇りであったが、今では費用が掛かり準備が大変で損だという考えから、その習慣が廃れたのだという。「今では煮たき（鶏の煮物）もしない」（70歳代男性）と嘆く人もいた。

・七日講

明治初めに金沢西別院が火事になって、それを再建するために7日の日に集まって、懇志を持ち寄ったのが始まりではないかと言われる。最も新しく組織されたお講である。

・晦日講

19日だけでは少ないということで組織された。

(3)男女別で行われるお講

・玉日講

「玉日講」は3、7、11月の25日に、定期的に羽水組内の寺院で営まれる女性門徒だけのお講であり、女性による全国規模のお講団体である。杉野屋の玉日講講社は、戦後に光照寺前住職によってつくられた。在所の女性が亡くなった際には、玉日講講社で葬式のお座の世話をした。最大で132軒が杉野屋から参加していた時期があったが、2002年5月に解散した。

玉日講の最後の講長、Kさん（70歳代女性）は13年間その任務を勤めた。後継者がいなかったため、それだけの長い期間の任務になったということだ。杉野屋だけで会員は120人いたが、お講に参加するメンバーはだいたい決まっていたそうだ。玉日講解散の理由は、仏事に熱のある人が高齢になってしまって参加者が減ってしまったことと、そのために資金の運営面で厳しくなったことであるという。

なお、1992（平成4）年に光照寺で、2002（平成14）年に安専寺で、それぞれ仏教婦人会が結成されたが、会合を開くだけの段階で、まだ発展してない。

・興教会

「興教会」は、戦後に光照寺前住職によってつくられた杉野屋の講社、つまり村お講である。構成員は杉野屋在住の本願寺派120世帯すべての男性門徒であり、杉野屋で男性が亡くなった際、葬式のお座の世話をする。その日程は、葬式の後に、19時30分頃から『正信偈』が読まれ、そのとき担当の住職によるお説教、そしてご消息が読まれるといったものである。このご消息は約50年前に発行された。

Ⅳ. お講の事例

1．寺お講

2002年10月3、4日に光照寺の報恩講は行われた。その様子について、光照寺住職からお話を伺った。

1日目は14時に始まる。50年前なら100人、少し前なら7、80人は集まっていたが、ここ4、5年で約4、50人に減ったという。

本堂でお経が読まれた後、14時30分過ぎに布教師（仏事の講師。だいたいが他のお寺から招いた僧侶）によるお説教が始まる。これで「日中」のおつとめは終わりである。16時には終了する。お斎は昼のおつとめの後かその後にとられる。昔はおつとめ終了後も人々はお寺にとどまったが、今ではみんな帰る。

そして20時から、昼間お斎（後述）を作るためにずっと台所にいた人が、おつとめに参加する。ここでは『御伝抄』の上をお仲間の2人によって読まれる。昔は上・下ともに読んでいた。

20時30分過ぎにお説教が始まり、21時過ぎに「初夜（逮夜）」は終了。

2日目。10時に『礼讃（日没偈礼讃［にちもつげらいさん］）』を読む。

10時30分頃からお説教が始まり、11時30分に「お朝事（晨朝［じんじょう］）」終了。お斎がとられ、昼の日程の「満座」は1日目の「日中」と同じである。安専寺の報恩講（11月1、

２日）もだいたい光照寺のものと同じである。

もとは午前中に「御示談（仏事に対するディスカッション）」を含むおつとめをし、お斎をとり、午後のおつとめをするという日程であったが、ある時期から「御示談」があまりにも専門的過ぎて分からないという理由から、午前中のおつとめをなくした。

表２　光照寺報恩講の日程（2002年10月３、４日）

１日目	日中	14:00	お経
		14:30	布教師によるお説教
	初夜（逮夜）	20:00	『御伝抄』
		20:30	お説教
		21:00	終了
２日目	朝事（晨朝）	10:00	『礼讃（日没偈礼讃）』
		10:30	お説教
		11:30	終了
			お斎
	満座（日中と同じ）		

*お斎（とき）は逮夜の前か後にとる

また、最近では夜のおつとめをするお寺が減ってしまった。おつとめの参加者が３、４人しかいなければ、布教師に申し訳ないという理由である。参加者は10人いればいいほどで、光照寺では13、４人お参りにくるので続けているが、10人以下になったらその存続を検討するということである。そしてここ４、５年、おつとめに来る人は減ってきている。おつとめは真宗の門徒なら誰でも参加が出来る。光照寺住職が子供の頃の約50年前までは、光照寺へ泊まりがけで、金沢や氷見、高岡などからも人がやってきた。

昔は、報恩講の日になると、安専寺にも光照寺にも、お寺の周りに露天商の人々がやってきて屋台が出た。子供はそれが楽しみで、賑わっていた。終戦後もしばらくこの様子は見られたのだが、今ではない。

また、「お斎」とは報恩講の時だけに作られる料理のことであり、女性門徒によって作られる。その台所役のメンバーは毎年だいたい決まっている。他のお講は仕出し屋のお弁当で済まされる。メニューは、豆腐や小芋が入った「あずきじる」、「まるやま」（＝がんもどき）、大根と人参の酢の物、ゼンマイの白あえといったものだ。メニューは年によって変わるという。

「寺も講社も、昔はお重にふきや豆腐の炊いたものを詰めて持ってきたりしたものだが、今ではお寺の住人や関わりのある人のみで働くようになってしまった。門徒さんの教育も大事で

はないか」（70歳代女性）と訴える人もいた。なお、男性の門徒の仕事は、前日に旗を立てたり、ロウソク代を納めた人の名前が書かれたはり紙をお御堂に貼ったりすることである。

2．在家お講

ここで、2003年1月7日に私が実際に見学した七日講の様子について記す。

今年（2003年）の元旦はとてもさわやかないい天気であったが、この日は朝から雪が降っていて、とても寒かった。しかし、会場である安専寺には9時過ぎから人々が集まり始め、最終的に参加者は30人弱となった。3つの掛け軸がお堂の中央に掛かっていたが、それは十九日講用で、普通は掛かっていない。

10時10分にスタート。講長の挨拶が始まり、年頭の言葉がマイクを通して話され、会場は和やかな雰囲気であった。年頭の言葉では、今日初めて参加した私のために十九日講の由来などを語ってくれた。

10時35分「御示談」。『孟夏仲旬』について語られた。

10時50分からよく仏事を勉強なされている3人の法話がなされた。その後、参加者の質疑応答。この日は私が以前、十九日講監事のY氏（70歳代男性）に質問したこと（それぞれのお講の由来など）を、Y氏本人が質問してくれた。

12時5分、Y氏が長い柄のかごで200円のさい銭を集める。

その後、お斎の時間である。この地域でよく利用されている、羽咋の仕出し屋の弁当が出された。そして台所係による豚汁（ゆずの香りが広がって、大変美味であった）や参加者の1人が持参してきた漬け物、デザートにはみかんを頂いた。

12時50分に「おはじまり」の鐘が7回なる。ここではおつとめの始まる10分前に鳴らされるのだが、その時間や鐘の鳴らされる回数は、地域によって異なるという。

13時から「勤修［ごんぎょう］」が始まる。

13時20分から『正信念仏偈』、『念仏和讃』を読み、13時40分から2つのご消息が読まれた。その後『領解文』を読み、これは法座が済むと必ず読むという。そして14時から安専寺住職によるお説教。14時30分に七日講は終了した。

表3　七日講の日程（2003年1月7日）

10:00	年頭の言葉
10:35	御示談
10:50	法話
12:05	さい銭集め
	お斎

13:00	勤修
13:20	正信念仏偈、念仏和讃
13:40	2つのご消息、領解文
14:00	お説教
14:30	終了

V．住民のお講に対する意識

杉野屋の住民はお講など仏事ごとに対してどう考えているのだろうか。

若い世代についていえば、聞き取りをした30歳代の人々は、お講はおろか、仏事全般に対して無関心であったように思う。

2002年12月22日に集会場で開かれた、子供会主催の「クリスマス会」に来ていた30歳代の保護者の方達にお話を伺った。「除夜の鐘もつかない」、「60歳代半ばの安専寺門徒のおばあさんもあまり熱心ではない」（30歳代男性）、「除夜の鐘や法事の時しか関わらない」（30歳代男性）、「光照寺門徒のおばあさんは朝、晩仏壇に向かってお参りしているが自分はしていない」（30歳代女性）、「費用も掛かるし大変だと思う」、「若い人がお寺に関わりがないのは、やはり時間も気持ちもないのでは」（30歳代女性）、「祖父母はお講に参加しているが、自分は身内が亡くなった時などにしか関わりがない」、「自分の子供も関わりない」（30歳代女性）といった言葉が聞かれた。

次に高齢者の声であるが、聞き取りをしたのは70歳代の人々が主であり、60歳代の人々から仏事に対する「気持ち」が薄くなっているのでは、と口を揃えて言っていた。1935（昭和10）年頃まで、光照寺の先代住職によって「日曜学校」が開かれていた。これは日曜日に子供がお寺に集まり、住職が『正信偈』を教えたり、お話をしたりする会である。ここで配られるお菓子が楽しみで、子供達は集まってきたという。この「日曜学校」がもとで、今の70歳代の人は、本を当てにせずに『正信偈』やお経を暗唱することが出来るそうだ。「60歳代の人は日曜学校がなかったために、熱心でないのかもしれないが、お経のことは伝え聞いていたであろう。やはり『気持ち』が薄くなったのではないか」（70歳代女性）と語る人もいた。

また、お講の参加者の特徴として、高齢者の女性が多いということが挙げられる。
「参加者のほとんどが女性なのは、女性が夫に先立たれて未亡人になる人が多いから」、「参りごとに対して男性はソッポを向く」（70歳代女性）という意見があった。実際に参加者でやもめの男性は少ないということである。

そして、杉野屋はそれほど仏事に対して熱心ではないという意見も聞かれた。

「杉野屋よりも羽咋市の中川町や円井［つむらい］町、里の方が仏事に熱心だ。昔は『若衆お講』などがあって若い人もお寺に寄ってきたが、今はそれもなくなり、そんな習慣はない。誰が悪いというわけでなく、浄土真宗の厳しさに気付くのが遅かったのだ」（70歳代女性）、「『杉野屋は２ヵ寺もあるのに、なんも参らん』と他所で言われたことがある」（70歳代女性）。

これらの若い世代と高齢の世代の意見から、お講、というよりも仏事全般に対する住民の意識が希薄化しているということがうかがえる。

ではそのような状況の中で、在所のお寺の住職はどのように考えているのだろうか。光照寺と安専寺でそれぞれに伺った。

「寺の役割は、葬式や法事などの『用事』のみだけなのだろうか。現代社会で寺に求められているものはなんなのだろうか。門徒さんの意識や他のお寺はどう思っているのか分からないが、考えてもしょうがないことなのかもしれない」(光照寺住職、60歳代男性)。昔、集まる所と言えばお寺であり、光照寺住職が子供の頃は、いろりや火に人があたりに来たという。

「人間は迷いが生じた時に、支えとなるものが必要である。それがお寺であってほしいのだが、お金や友人などが支えになる場合が多い。しかしバブルがはじけて不況になった今、精神的なものこそが支えになるのではないだろうか。800年、真宗は続いており、2002(平成14)年の本山大修復の際には、御崇敬時に寄付を募れば、やはりみなさんくださった。また、2000(平成12)年に安専寺が御崇敬を行う際、大修復をして1,000万円かかったため、門徒1軒につき数10万円の寄付をしてくださった。若い人の家でも、親の姿を見てきたのか、しぶしぶであったかもしれないが寄付をして下さった。このように、親を見て、その息子、娘もお寺に寄付してくれることもあるのだ。金沢ではお通夜の際にご説法をしない僧侶がいる。やはりわれわれ僧侶が辛いときにこそ、ご説法をして布教していかなくてはならない」(安専寺住職、40歳代男性)。

VI. おわりに

お講には宗教的な目的が第1にあるが、いつしか人々が集まって話をしたり、飲み食いをするといった、「サロン」のような場としての機能が付加されるようになった。それが楽しみでお講に参加していたという70歳代の人もいた。しかし最初の取っ掛かりが娯楽目的であっても、何度か足を運ぶにつれて、仏事に興味を持つようになっていくものであるという。

ところが、戦後になって様々な娯楽(テレビ、パチンコ…等)が生まれ、お講にわざわざ出向かなくてもいくらでも楽しみがある生活に変化すると、お講離れが進んでしまった。今回の調査から、杉野屋の消えていったお講のほとんどが戦後に消えたものであることが分かるし、また、現存するお講も、戦後になってかなり簡素化されているようである。

そして、杉野屋はそれほど深刻に過疎化が進んでいる地域ではないのだが(1章参照)、次世代にお講の後継者がいないということも、これからのお講存続にとって大きな問題となっている。つまり、集落には高齢者だけではなく若い世代もいるのだが、お講に関心のある若い世代は皆無だ、といっても過言ではない状況にあるのだ。

若い世代の人々に聞き取りをしたところ、「お講は年寄りのもの」というイメージがあるように感じられたが、では、今の若い世代が年をとった時、彼らはお講に興味を持つようになるのだろうか。

現在、杉野屋の70歳代の人々は子供の頃から「日曜学校」などでお寺に集まり、真宗の教えを学ぶ機会があった。また、かつては若い衆お講など、青年層のためのお講も存在した。つまり、小さな頃からお寺は身近であったし、真宗の教えに触れる機会は少なくともあった。だが、先述したように、今ではそれらの集まりが存在しないので、次世代にお講を受け継いでもらうための準備期間が設けられていない。お講がどういう集まりなのか、そこで教えられている真宗の考えとはどのようなものか、そんなふうに興味を持つきっかけ作りの場がないのだ。

お講は蓮如上人の時代から始まる、歴史ある最も強力な布教手段の1つであったが、時代の流れの中で、その機能が果たせない状態になりつつあるように感じられる。それは杉野屋にもあてはまるし、過去の数々の調査実習報告書を見ても、調査が行われた地域すべてにおいてあてはまるようだ。私にはお講のこれからの形態や存続について予測をすることは出来ないが、今回の調査実習がきっかけでお講に参加する機会に恵まれ、当然であるが、実習以前よりは仏教に対する関心が高くなった。そのような機会が与えられたことのない若者よりも、将来、仏教に興味を持つ可能性は高いように感じられる。この経験から、子供達が仏教に触れる機会、つまり日曜学校などが消滅することなく存在し、また、それに通うことが在所内の子供の習慣である、という考えが残っていれば…。口でいうのは簡単だが、そんな希望を考えずにはいられない調査であった。